令和８年度

揖斐郡読書感想文優秀作品集



揖斐郡教育会

揖斐郡読書感想文推進委員会

はじめに

揖斐郡読書感想文推進委員会委員長　宗宮　一夫

今年度も、この郡読書感想文集をお届けできることを本当にうれしく、またありがたく思っています。近年、小中学生の読書量の減少や、応募数の縮小が全国的な傾向として語られています。しかし、そのような状況にあっても、本郡では今年度も多くの子どもたちが一冊一冊の本と真摯に向き合い、思いや気付きを丁寧に言葉で表してくれました。本書に収められた作品は、どれもその努力の結晶であり、それぞれの発達段階に応じた考え方や感じ方、感性のすばらしさがはっきりと記されています。

読書は、ただ文字を追うだけの行為ではありません。本の世界に入り込み、登場人物の心に寄り添うことで、自分自身の価値観が揺さぶられる体験でもあります。子どもたちはその体験を通して、自分の考えを深め、想像力や感受性を磨き、より豊かな人間性を育んでいきます。さらに感想を文章で表すことによって、自らの思考を整理し、他者に伝える力（表現力）も身に付けていきます。義務教育段階でこういった体験をすることは、とても大切なことです。文集に収められている作品一つ一つからもその子自身の考えの深まりや新たな気付きを得たことが伝わってきます。これからもたくさんのよい本と出会い、深い知識や考えを身に付け、生涯にわたり学び続けてほしいと願っています。

また、この文集ができあがるまでには、多くの方々の支えがありました。子どもたちと読書に向き合う時間をつくり、ともに考え、寄り添ってくださった保護者の皆さま。日々の授業の中で読書の楽しさを伝え、感想文の書き方を丁寧に指導してくださった先生方。作品の選考や編集に携わってくださった関係者の皆さま。皆さま方の熱意とご尽力があってこそ、この一冊は完成しました。深く感謝申し上げます。

最後に、応募してくれたすべての児童生徒の皆さんへ心からの称賛を贈ります。あなたたちが本と向き合い、言葉を選び、思いを形にしたその体験は、必ずこれからの人生を支える力となります。どうかこれからも、本を開くことで広がる世界を楽しみ、感じたことを自分の言葉で表現する喜びを大切にしてほしいと思います。そしてこの感想文集が次の一冊へと向かうきっかけとなることを願っております。

令和八年度　揖斐郡読書感想文優秀作品集　目次

Ⅰ　はじめに
令和八年度郡読書感想文推進委員会顧問　宗宮　一夫　校長　1

Ⅱ　目次　2

Ⅲ　令和八年度　揖斐郡読書感想文コンクール実施要項　3

Ⅳ　令和八年度　揖斐郡読書感想文　出品者数・入賞者数　4

【小学校低学年の部】

□自由図書部門

「ごめんね、だいすき」
揖斐川町立小島小学校　一年　橋本　怜奈　5

□自由図書部門

「じゅえきってすごい」
揖斐川町立北方小学校　二年　折戸　珀心　6

【小学校中学年の部】

■課題図書部門

「あきらめない工作とお米」
揖斐川町立揖斐小学校　三年　林　尚希　7

□自由図書部門

「クマ「に」森を返すとは？」
大野町立西小学校　四年　丹羽　悠晴　8



【小学校高学年の部】

□自由図書部門

「死ぬことと生きること」
大野町立南小学校　五年　三間　匠馬　9

□自由図書部門

「たった一つの大切な命」
揖斐川町立小島小学校　六年　窪田　光我　10

【中学校の部】

■課題図書部門

「なにもかも自分優先って正しいの？」
揖斐川町立揖斐川中学校　一年　細野　珠可　11

■課題図書部門

「いつか大きな炎となる日」
揖斐川町立北和中学校　一年　今西　康瑛　13

Ⅴ　読書感想文審査を終えて
令和八年度読書感想文推進委員会郡代表　松野　有希　教諭　13



【表紙画】　揖斐川町立北方小学校　一年　増元　柊介

（敬称略）

令和八年度　揖斐郡読書感想文コンクール実施要項

一．名称　揖斐郡読書感想文コンクール

二．目的　学校図書館における読書指導の充実振興と児童・生徒の健全かつ豊かな心の育成と読書能力の向上に資する。

三．主催　揖斐郡教育会
揖斐郡教育研究会学校図書館部会

四．期日と会場と審査方法
地区審査・・・令和八年八月二十七日または二十八日　町ごとに実施
各地区理事が設定した場所で地区ごとの図書館主任が、審査委員会を構成して行う。
郡審査・・・令和八年九月二日　午後一時～午後四時
揖斐郡教育研修センターにて、揖斐郡図書館部会の役員及び各地区理事で審査委員会を構成して行う。

五．応募規定
◆用紙　原稿用紙を使用する。
◆出品作品
・自由図書の部・・・小説、童話、民話、戯曲、詩歌、伝記、ノンフィクションなど　課題図書以外
・課題図書の部・・・課題図書
◆字数（題名、学校名、氏名は除く）
・小学校低学年・・・・・八百字以内
・小学校中、高学年・・・千二百字以内
・中学校・・・・・・・・二千字以内
◆作品には、必ず応募票をつける。
◆各学校で部門別に応募点数を把握し、報告する。

六．審査委員
委員長・・・揖斐郡読書感想文推進委員会委員長
副委員長・・・郡読書感想文推進委員会郡代表
委員・・・・・郡読書感想文推進委員会役員、地区理事

七．審査について
（1）審査は、小学校低・中・高学年、中学校の四部門に分け、さらに部門別、学年別に行う。
（2）賞の種類及び点数　（郡の応募総数が一一八七点のため県規定より）
①特選（入選者の中から）　※揖斐郡の代表として県へ送付する。
小学校低学年の部・・・自由・課題両部門含み　計二点
小学校中学年の部・・・自由・課題両部門含み　計二点
小学校高学年の部・・・自由・課題両部門含み　計二点
中学校の部・・・・・・自由・課題両部門含み　計二点
②入選・・・各学年　自由・課題ごとに全体数の三割合程度
③佳作・・・郡読書感想文コンクールに出品された特選・入選に選ばれた作品以外

八．審査の窓
① 読書の喜びや楽しみを感じることができる。
② 読書による自己の変容を伺うことができる。
③ 学年の発達段階に応じた考え方・感じ方をしている。
・小学校低・中学年では、読んで楽しい作品でありたい。
・小学校高学年では、広い視野から作品を捉えたものでありたい。
・中学生は、自分の体験を土台にして批評を加えたり、共感をしたりしている作品が望ましい。
④ 自分の言葉で生き生きと表現している。
⑤ 自分の意見や感想を素直に述べ、読み手によく分かる。
⑥ 図書の選択が、発達段階に適している。
⑦ 部分的でなく、作品全体の感想になっている。
⑧ 応募規定に達している。

九．その他
作品の応募に際して、十分に指導しておきたいこと
・文章の構成はよいか。
・文章のねじれはないか。
・誤字・脱字はないか。
・文字は丁寧で読みやすいか。

十．作品集
優秀作品については、「読書感想文優秀作品集」としてまとめ、郡内各小中学校に配付するとともに、揖斐郡研究センターホームページに「デジタル版読書感想文優秀作品集」として掲載する。

令和８年度揖斐郡読書感想文　郡出品数・入賞者数

小　学　校	郡への出品数	特選	入選	佳作
小学校・低　自由	5	2	0	3
小学校・低　課題	17	0	4	13
１年自由	4	1	0	3
１年課題	6	0	1	5
２年自由	1	1	0	0
２年課題	11	0	3	8
小学校・中　自由	10	1	4	5
小学校・中　課題	13	1	6	6
３年自由	4	0	2	2
３年課題	7	1	2	4
４年自由	6	1	2	3
４年課題	6	0	4	2
小学校・高　自由	25	2	5	18
小学校・高　課題	8	0	2	6
５年自由	10	1	3	6
５年課題	4	0	2	2
６年自由	15	1	2	12
６年課題	4	0	0	4
小学校　自由	40	5	9	26
小学校　課題	38	1	12	25
小学校	78	6	21	51

中　学　校	郡への出品数	特選	入選	佳作
中１自由	12	0	4	8
中１課題	4	2	0	2
中２自由	17	0	2	15
中２課題	2	0	0	2
中３自由	16	0	2	14
中３課題	6	0	2	4
中学校　自由	45	0	8	37
中学校　課題	12	2	2	8
中学校	57	2	10	45

小学校低学年の部

特選　自由図書部門

ごめんね、だいすき

揖斐川町立小島小学校　一年
橋本　怜奈

「だいきらい。」

わたしには、三ねんせいのおにいちゃんがいます。けんかをするとついいってしまいます。本とうはだいすきなのに。すなおに「ごめんね」がいえないじぶんをおもいだします。だから、この本のだいめいをみたとき、どんなおはなしなのかきになってよみました。

この本では、おおかみときつねがけんかをしてしまいます。ふたりともなかなおりをしたいのに、「ごめんね」がなかなかいえません。じぶんはおおかみそっくりだなとおもいました。あいてはわるくないのに、おこると、おもっていないことまでいってしまって、すぐに「ごめんね」がいえないのが、わたしのよくないところだときづきました。

ある日、おにいちゃんとブロックであそんでいました。おにいちゃんのてがあたって、わたしがつくったものがこわれてしまいました。おにいちゃんはすぐに「ごめんね」といってくれたのに、わたしは、「だいきらい!!」といってしまいました。おにいちゃんのかなしそうなかおをみて、そんなといわなければよかったと、わたしも「ごめんね」といいたくなりました。でも、はずかしくていえませんでした。

さいごに、おおかみときつねは「ごめんね」をいってなかなおりできたとき、わたしもうれしくなりました。ふたりがまたえがおになってなかよくなれたからです。すなおなきもちをつたえることはゆうきがいるし、むずかしいけどたいせつなことだとおもいました。



この本をよんで、「ごめんね」は、なかなおりできるまほうのことばだとおもいました。これからは、ゆうきをだして、すなおなきもちをつたえたいです。おにいちゃんと、ずっとなかよしでいたいからです。けんかをしても「だいきらい!!」ではなくて、「ごめんね」と「だいすき」をいえるわたしになりたいです。

内田　麟太郎　作
『ごめんねともだち』
偕成社

【講評】
登場人物の気持ちに共感し、「ごめんね。」と伝える難しさと大切さについて考えることができました。ずっと仲良していたいという願いから、こんな自分になりたいという思いを明確に書いているところが素晴らしいです。

小学校低学年の部

特選　自由図書部門

じゅえきって　すごい

揖斐川町立北方小学校　二年

折戸　珀心

「黒くて、つやつやのキミ！ぼくのナンバーワンは、キミだよ！カブトムシくん！」

小学校に入学してから、図書しつに行くのがぼくのたのしみの一つです。「ふしぎいっぱいしゃしん絵本シリーズ」は、ぜんぶ読みました。この夏はもう一かい、じっくり読むことにしました。

絵本の虫たちを見ているといつも思います。「どうやってこんなにたくさんの虫を見つけたのだろう。」

虫の方からぼくに近づいて来てくれたらおもしろいし、虫と同じサイズなってぼうけんに行けたらたのしいだろうと思います。きっと何日も森に入って、長い時間をまってさいこうの一まいをとっているんだとそうぞうします。ぼくだったら、虫に出会えるまでまてるかな。

「どうして虫たちはじゅえきがすきなのだろう。」

ぼくがすきな食べものは、ごはん。白まいです。きゅう食の時には、先生と同じくらいのりょうを食べます。ぼくはごはんをもりもり食べる。虫たちがじゅえきをすう。すきなものがぜんぜんちがうことが、おもしろいと思いました。カブトムシやクワガタムシだけではなく、いろいろな虫たちはじゅえきをすって、一生けんめい生きていることがわかりました。



生きものは本当にふしぎです。今まで気にもとめなかった木が、虫たちにとっては大切なレストランで、ぼくにとっては日かげです。もしかしたら、ぼくの知らないせかいが広がっているかもしれません。はっぱでかくれたところでは？土のなかでは？そうぞうするとわくわくします。

これからもみぢかなしぜんに目をむけて、生きもののひみつをもっと見つけたいです。

新開　孝　作

『じゅえきレストラン』

ポプラ社

【講評】

読み手をひきつける書き出しや言葉選び、次々と読みたくなる文章の組み立てが工夫されていました。大好きな絵本を読み、虫や本づくりに関わる人の気持ちを想像しながら、自分の経験と重ねて考えているところが素敵でした。

小学校中学年の部

特選　課題図書部門

あきらめない工作とお米

揖斐川町立揖斐小学校　三年

林　尚希

ぼくは、ツナマヨのおにぎりが大好きです。いつも当たり前のように食べているけれど、この本を読んでから、お米を見る目がすっかり変わってしまいました。

本の主人公のゆうちゃんは、ぼくと同じ小学生なのに、自分で米作りをはじめます。ゆうちゃんがやりたかったのは、虫を殺す薬を全く使わない、昔ながらの安心でおいしいお米作りです。ぼくは、本当に小学生にお米なんて作れるのかなと、ドキドキしながら読みました。やはり、お米を作るのは、思った以上に大変なことばかりでした。

ぼくが一番心にのこったのは、ゆうちゃんの一年目の米作りがうまくいかなかったところです。目ひょうよりずっと少ないお米しかとれなくて、ゆうちゃんはとてもくやしい思いをしました。それでもあきらめずに、二年目はカブトエビという生き物の力を借りるなど、いろいろな工夫をして、またちょうせんしました。ぼくは、そのすがたを見て、本当にかっこいいなと思いました。

もしぼくだったら、一回失敗しただけでいやになって、やめていたかもしれません。でもぼくは、大好きな図工の時間に、じっくり時間をかけて絵をかいて、しょうをもらったことがあります。途中で色をぬるのが大変だったり、しっぱいしてやり直したりしたけれど、アイディアを考えてさい後まであきらめずにかきました。だから、おいしいお米のためにちえをしぼって何どもやりなおす、ゆうちゃんの強い心を見て、ぼくも全く同じ気持ちになりました。

ゆうちゃんがいっしょうけんめいがんばるから、みんなもおうえんしてくれるようになります。秋にみんなでいねかりをして、自分で作った新米を食べたとき、ゆうちゃんは「世界一おいしい！」と言っていました。ぼくは、その一文を読んだとき、なんだかむねが「ジーン」としました。



そういえばきょねんは、お米がたりなくなって、お店でねだんが高くなったというニュースを見ました。そのときは、ふしぎだったけれど、この本を読んで、その理由が分かりました。お茶わんの中の一つぶ一つぶには、作った人のあせとしっぱいしてもあきらめないたくさんの時間がつまっていると思ったからです。

これからは、大好きなツナマヨおにぎりや、ごはんを食べるときに「いただきます」の気持ちをもって、一つぶものこさずに食べようと思います。そして、ゆうちゃんのように、ぼくも、大好きな図工の時間や自分できめたことは、さいごまであきらめずにがんばる人になりたいです。

『おいしいお米をつくりたい！
ゆうちゃん、小学生で農家に弟子入りしました』

谷本　雄治　作

汐文社

【講評】

自分の経験を想起しながら、自己の信念を貫き、コメ作りに奮闘する主人公の様子に共感する心情を書くことができています。また、後段では、主題とする米づくりを取り巻く昨今の社会情勢にも目を向け、今後の自分の生き方について述べることができています。

小学校中学年の部

特選　自由図書部門

クマ「に」森を返すとは？

大野町立西小学校　四年
丹羽　悠晴

クマが人里に出没し、人をおそったというニュースをさい近よく目にします。ぼくはそのたびに、「クマは人をおそうこわい動物だ」と思っていました。そんなとき、「クマに森を返そうよ」という本に出会いました。

題名を見たとき、ぼくは「どうして『クマを森に返そうよ』ではないのだろう」とふしぎに思いました。本を読むと、その一文字には、人間とクマ、そして森とのつながりを考え直してほしいという作者のねがいがこめられていることが分かりました。

ぼくが一番心に残ったのは、「ほんとうの森」とよばれる原生林のことです。原生林にはブナやミズナラ、コナラなどの広葉樹がたくさん生えています。広葉樹にはクマの食べ物になる実がなり、そんな森があればクマは安心してくらすことができます。

しかし、戦後、人間は開発を進めたり、木材をとるためにスギやヒノキを植えたりしたため、広葉樹の森は人工林へ変わりました。その広さは一千万ヘクタールもあるそうです。その結果、食べ物にしている実がへり、クマは食べ物を探して人里におりてくるようになったのです。ぼくは、クマが町へ来るのはクマだけが悪いのではなく、人間にも原因があることを知り、とてもおどろきました。

特に印しょうに残ったのは、本の題名です。「クマを森に返そうよ」では、町に来たクマを山へ追い返すように感じます。でも、「クマに森を返そうよ」には、クマが安心してくらせる森を人間が取り戻そうという意味がこめられていると思いました。この題名には、人間が森を変えてしまったことを見つめ直してほしいという作者のねがいが表れていると感じました。



この本を読んでからは、ニュースで「クマが出た」と聞いても、「こわい」と思うだけではなく、「なぜ町へ来たのだろう」と理由を考えるようになりました。

ぼくの家の近くにも山があります。今まではせみのぬけがらを探して遊んだり、くりやきのこなどの食べ物を見つけたりする場所だと思っていましたが、今まではクマや鳥、虫など、たくさんの生き物がくらす大切な家なのだと考えるようになりました。これからは自然を大切にし、ごみをすてないなど、自分にできることをつづけていきたいです。

この本からぼくは、人間も自然の中で動物たちといっしょに生きていることを学びました。「クマに森を返そうよ」という言葉をわすれず、人間の都合だけでなく動物たちのことも考えながら生活していきたいです。

沢田　俊子　作
『クマに森を返そうよ』
汐文社

【講評】
クマについての考えが、本を読む前と読んだ後でどのように変わったのかがよく伝わりました。題名にこめられた意味を自分なりに考え、深く読み取っているところがすばらしいです。学んだことを身近な自然やこれからの生活につなげて考えている点にもとても感心しました。

小学校高学年の部

特選　自由図書部門

死ぬことと生きること

大野町立南小学校　五年

三間　匠馬

寒い冬の朝、テディが死んだ。クリーム色の少しかたい毛で、いつも笑ったような顔をした犬だった。テディのためなら、朝早くの一時間の散歩も、疲れた日の夕方の散歩も楽しかった。短い足も、よく動くしっぽもかわいかった。テディはぼくの大切な友達だった。

テディが死んでから、ぼくは死について考えるようになった。明日もしかしたら、ぼくも死ぬかもしれない。死んだらどうなるのか、夜ねようとすると考えてしまう。一度考え出すと胸をきゅっとつかまれるような気持ちになって、夜なかなかねつけない日が続いた。

そんな時にこの寿命図鑑という本に出会った。この本には生き物や体の器官、建物、天体など多種多様なものの寿命がのっている。虹は数分の寿命だし、チョウチンアンコウは一週間、サンゴは数世紀生きるものもある。犬の寿命は八～一五年だったから、十才のテディも寿命だったのかもしれない。色々な寿命がのっていたけれど、ただ一つ一緒なのは、全てのものに寿命があって、いつかは終わりが来るということだ。ぼくは悲しい気持ちになった。家族や友達、僕の大切な人たちとも必ず別れが来ると思うと、心が沈んでやりきれない気持ちになった。みんないつか死ぬのなら、なぜ今生きているのだろう。何のために勉強したり、友だちを作ったり、苦手なことを克服したりするのだろう。頑張る意味ってあるのかな、と考えるようになった。

その答えを教えてくれたのは、あとがきの言葉だ。「壊れたり、無くなったりしてしまうかもしれないから、宝物にしたくなるんだ。」そうか、逆の発想なんだ。ストンとふに落ちた。限られた時間だから、ぼくたちは一生けん命になるんだ。別れがくるから、出会いを大切にして、宝物を見つけられるんだ。

テディの死は悲しくてたまらなかったけれど、死について考えるきっかけをくれた。そしてかけがえのない時間と思い出をくれた。それはテディへの感謝と共に、ぼくの中に残ってかがやき続ける。

この夏、ぼくは心臓の手術を受ける。ぼくの心臓の寿命をのばすための手術だ。手術のことを考えると、不安でいっぱいになる。死が怖いという気持ちも、やっぱり変わらない。でもテディとこの本は心臓の手術に向きあう勇気をくれた。本には心臓の寿命は八十年と書いてあった。心臓は一生に三兆回も鼓動を打ち続けるらしい。血小板の寿命は十日、皮ふは四週間、骨は三年。死んでは生まれる細胞が、ぼくを生かそうと働いている。病院の先生がエコー検査の時に、ぼくの心臓を一つ一つ説明してくれた。拳くらいの大きさの心臓が、絶え間なくドクトクと力強く脈打っていた。今日もぼくの心臓は全力で動いている。その心臓のために、たくさんの人が助けてくれている。ありがとう。そして頑張ろう。いつかくる寿命の時に後悔のないように。



『寿命図鑑　生き物から宇宙まで万物の寿命をあつめた図鑑』

いろは出版　編・著

いろは出版

【講評】

「限られた時間だからこそ、一生けん命になれる」という気づきは、この本を深く読み、自分自身の経験と結び付けて考えたからこそ生まれたものだと思います。テディへの思い、自分の心臓への思い、そして支えてくれる人への感謝が一つにつながった、心のこもった感想文です。これからも、自分の心に生まれた疑問を大切にしながら、考えを深めていってほしいと思います。

小学校高学年の部
特選　自由図書部門

たった一つの大切な命

揖斐川町立小島小学校　六年
窪田　光我

「そんな軽い命なら私にください。」と、この本の題を読んだ時、軽い命ってどういう意味だろう。また、今まで命について深く考えたことがなかったので心がどきんとしました。

この言葉はすい臓ガンから肺へと転移し末期ガンとなり、余命一年半と宣言を受けた渡部成俊さんの言葉です。いつ命が亡くなってもおかしくない「余命ゼロ」という毎日の生活をどんな気持ちで過ごしていたのだろう。僕だったら悲しくて泣いてばかり。何も手につかず命が亡くなるという不安で心が折れてしまうことでしょう。でもそうではなく全国を回り、小中高の学校や一般の人などに命の尊さや人間としての生き方を伝える活動を続けてきたことにとっても感動しました。生きたくても生きられない人がいる中、また一方では自分から命を絶とうとする人がいることについて、作者は心の底から自分のたった一つしかない命を大切にしてほしいと叫びうったえたことにすばらしさを感じました。

実は昨年、僕の大好きな祖父が亡くなり、とってもとっても悲しい思いをしました。病気と七年間たたかい、少しずつ体が弱くなり最後はすうっと息を引き取りました。温かった手が冷たくなり、身動きもしない姿を見て命が亡くなるってこういうことなんだと実感しました。「もっと生きていてほしかった。」一緒に元気に過ごした時、遊んだり話したり笑顔いっぱいの祖父を思い出すと、くやしくて悲しくて涙が止まりませんでした。残された家族のみんなの心はぽかーんと穴が空いたようで何とも言えない気持ちになりました。

ところで、生きたくても生きられなかった人は、今の世の中にはたくさんいます。それなのに自分の命を軽いものとして簡単に捨てる人がいることは本当に悲しいことだと祖父の死を通してよく分かりました。残された周りの人は、どれだけ心に傷つき悲しむかということを考えた時、命をむだにして簡単に死を選ぶことを絶対にしてはいけないと自分の心に言い聞かせました。

この本に出会って渡部さんの生き方を学ぶことができました。毎日を当たり前のように感じて、朝起きて学校へ行き、先生や友達と楽しく過ごし、家族とは食事をしたり色々なことをしたりして生活していることがずっと続くものだと思っていたが…。でも命はいつ亡くなるか分からない。だからこそ、今生きているこの時がとても大切なものだと思えるようになってきました。

最後に死ぬ寸前まで命の大切さをうったえたことと生きることの意味を教えてもらって本当に良かったとお礼が言いたいです。全てのものに感謝して生きる、世のため人のために尽くす、どんな辛いことにも耐え抜くということを。これから先、祖父の笑顔や渡部さんの生きていくための力強い言葉を思い出して、自分の夢に向かって頑張り続けたいです。



『そんな軽い命なら私にください
余命ゼロいのちのメッセージ』
渡部　成俊　作
大和書房

【講評】
命を大切にする作者の生き方と、自分の生活体験を重ねることで、考えを深めようとした姿勢が素晴らしいです。身近な人の死を経験し、悲しみだけで終わらず、生きることのありがたさや喜びに気付くことができました。

中学校の部

特選　課題図書部門

なにもかも自分優先って正しいの？

揖斐川町立揖斐川中学校　一年

細野　珠可

誰かのために自分を犠牲にするという経験が少ない私は、優先する順番を当りまえのように「自分」として行動していました。誰かを優先したところで、私自身にはなにも得るものがないし、自分が我慢するということが決して「良いこと」には思えなかったからです。しかし、この本を読んで、障がいのある姉を支えて生きている主人公・葉澄が、自分の本音を隠して生活していることが分かりました。葉澄の姿から、私に本当の優しさとは何か、そして自分自身を大切にするということがどういうことにつながっていくのかを深く考えさせられました。

特に心に残ったのは、葉澄がきょうだい会の「つなぎび」に参加し、同じように障がいをもっている子の兄弟の子たちで話す場面です。それまで葉澄は、姉の菜々実のことを最優先にし、自分のやりたいことや思っている気持ちを誰にも言えずに一人で抱え込んでいました。しかし、きょうだい会で出会った恵太たちの「自分だけの未来を選びたい」という言葉に触れ、葉澄の初めて自分の心の中にある本当の気持ちと、自分自身の人生を生きたいという気持ちが激しく揺れ動く思いに強く共感することができました。この葉澄の姿を見て、私は学校の友達や部活での自分自身のことを思い出しました。私はたまに、場の雰囲気や空気をこわしたくなくて自分の思いがあっても周りに合わせることがあります。部活動で練習のペアをつくるとき、本当は何も考えずに自由に組みたいという気持ちがあっても、「この子はあの子と組みたいんだろうな。」などと周りの空気を読んで遠慮し、結局残った人と組んでしまいます。「私さえ気を遣えばみんなが揉めずに平和になるだろう。」と考えてしまうからです。しかし、そのたびに心の中には、言葉にできないモヤモヤとした寂しさが残っていました。作中できょうだい会の仲間が、「生存する人の全員が健常者で障がい者は排除されて成り立つ社会があるとしたら……そこにやさしさはあるんかな。」と問いかける場面があります。私はこの言葉を読んだとき、ハッとさせられました。なぜなら、葉澄が姉の菜々実を大切に思っていながらも、自分の人生や希望を諦めたくないと葛藤したように、私もあの経験を振り返って、誰かを思いやることと、自分自身を犠牲にすることは同じではないはずと気づいたからです。物語の後半、

葉澄は周囲の人々とぶつかり合っても意見や気持ちを強く抱き続けて、姉も自分も両方大切にする道を探し始めます。私はその姿を見て、本当の優しさとは、誰かに言われるがまま我慢することではないと強く思えました。自分の本当の気持ちを大切にし、認め合いながら生きていける関係こそが一番大切だと気付いたからです。

私の周りにはよく誰かを優先して、譲ってくれる子がいます。これまでの私は、その優しさに甘え、「この子は代わってくれるからいいよね。」と相手の本当の気持ちを深く考えていませんでした。今ちゃんと考えてみれば、「なんで代わってくれたんだろう」や、「本当にそれでいいのか」を相手に聞くなどの寄り添いが必要だったのかもしれないです。この本の中でも、葉澄たちのようなきょうだい児の子達は周りのためにいつも「平気なフリ」をしていたように、その子も心の中では言いたいことを我慢して、モヤモヤとした思いを抱えていたのかもしれないと考えることもできました。見ただけじゃわからないし、どんな気持ちなのかも知らないけど、ひと声かけてあげられる自分になりたいです。そうすることが、お互いを本当の意味で大切にすることにつながるのだと考えられたし、支え合えばきっと少しでも心が軽くなれると思いました。逆に、私がもし葉澄のような立場だったら姉のことをこんなに深く考えられないと思いました。いつも他人ごとのような自分だった私がそんな立場になっていたらどんなことを考えるのか？きっと、そんなことは誰にも考えられないと思います。だからこそ、その子の話を聞いてあげる。それが私の中での課題です。

『君の火がゆらめいている』という本は、ただの家族の物語ではなく、私自身の生き方や周りの人との関わり方を改めて見つめ直させてくれた大切な一冊となりました。誰かのために我慢して平気なフリをするのは、もうやめようと思います。でも、その代わりに、誰かを優先してくれている子への気遣いをしてみようと思います。今までしたことがなかったからこそ挑戦してみようと思います。自分の本音を大切にしながらもお互いに声を聴き合える関係を築いていくこと。それこそが私がこの本から受け取ったメッセージです。



落合　由佳　作

『君の火がゆらめいている』

講談社

【講評】

自分の生き方や周りの人との関わり方について、自分と向き合い、じっくりと考えました。この夏、珠可さんが読書を通して今の自分を振り返り、自身との対話ができたことが何よりも得難い『宝』だと読んでいて感じられました。

令和八年度　揖斐郡読書感想文審査を終えて

揖斐郡読書感想文推進委員会

今年度は一〇七二点の応募がありました。これらを自由図書部門・課題図書部門に分け、学年部ごとに慎重し審査し、特選、入選、佳作を決定しました。

優れた感想文に共通していたのは、本を読むことをきっかけとしてこれまで気付いていなかった心の中の思いや願いを掘り起こし、それを読書感想文として自分の言葉で表現していたことです。また、生成ＡＩでは書くことができないような、自分だけの感動や、身近な人から教えてもらったことを大切にしながら、自分らしく表現した感想文も多く見られました。

審査をしていく中で気付いた点をいくつかまとめました。今後の読書感想文を書く際の参考にしていただければ幸いです。

（◇…よい点　◆…改善点を表しています。）

【低学年の部】

◇本の内容と自分の生活を深く結び付けて、自分の考えをまとめている作品があった。

◇家族との関わりと本の内容をつなげて考えてある作品があり、家族で本に親しむ機会を大切にしていることが伝わってきた。

◆あらすじを順に追って書くだけの作品にならないようにしたい。

【中学年の部】

◇熱意の伝わる丁寧な文章で書かれている作品が多く見られた。

◇読み手の心を惹き付ける、工夫された書き出し方である作品だった。

◆題名にも自分の思いや願いを込めることで、より読み手を惹きつける作品にしてほしい。

【高学年の部】

◇自分の実体験と読んだ本の内容を結び付けるための工夫がみられる作品があった。

◇本の内容と自分の体験を関連付け、バランスよくまとめられていた。

◆途中で内容がずれるものもあり、書く前に構想を練ることで、よりまとまりのある文章にしてほしい。

【中学校の部】

◇実体験に基づいて書かれた作品が多く、自分の思いや考えが伝わる作品が多く見られた。

◇書き出しが工夫されている作品が多かった。

◆誤字脱字があるものや、原稿用紙の正しい使い方ができていない作品があった。

今年度も大変多くの作品を応募していただき、ありがとうございました。今後も、思いや考えが込められた、素晴らしい作品が一層増えることを願っております。